第２３期考古学セミナー（2021年度）

－発掘調査でわかった山形県内の近世城郭と出土遺物－

第３回講座

講義⑤

鶴ヶ岡城跡の発掘調査と出土遺物

（公財）山形県埋蔵文化財センター

菅原　哲文　氏

令和３年10月１７日（日）

会場　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

鶴ヶ岡城跡の発掘調査と出土遺物

山形県埋蔵文化財センター　菅原哲文

１　はじめに

鶴ヶ岡城跡は、鶴岡市馬場町、市街地の中に位置し、江戸時代に酒井氏の庄内藩十三万八千石の居城として整備された。現在、建物は残されていないが、本丸と二の丸が公園として整備され、城下町鶴岡のシンボルとなっている。また江戸時代初期には、最上義光の隠居城として整備された経緯がある。平成 11・12 年の２ヵ年にわたり、東北公益文化大学新築事業（大学院・研究センター）により、山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。調査範囲は、城の二の丸堀と土塁、百間堀、二の丸郭内の一部で、延べ調査面積は 11,245 ㎡である（山形県埋文 2002）（調査区は、第１図参照）。

調査地点は、絵図面との対応により、当時の城の地点との対応が明らかになっている（第２図）。

２　鶴ヶ岡城跡の歴史

（１）武藤氏により築城

中世では「大宝寺城」と称され、室町時代初期頃に大泉荘の地頭であった武藤長盛によって築城されたと伝えられる（第２図年表）。室町時代の武藤氏は、足利将軍家との関係を維持し、武藤淳氏は出羽守に任じられている。戦国時代になると、武藤氏は庶族であった砂越氏と対立し、大宝寺城下は戦火により亡所となる。また本拠は尾浦城に移された。

（２）武藤氏が滅亡し最上氏の支配へ

天正 11 年（1583）武藤義氏は最上氏に内通した家臣により滅ぼされる。天正 15 年(1587)に最上勢が庄内に侵攻し、最上氏の支配下となる。

（３）上杉氏の支配

天正 16 年（1588）本庄繁長は上杉氏の後援をうけ庄内に侵攻し、十五里ヶ原の戦いで最上勢を破る。庄内は実質的には上杉領となる。天正 18 年（1590）庄内の検地に反対する一揆が起きるが直江兼続により平定される。直江兼続は大宝寺城を取り立てて修復する。

（４）最上氏の支配

関ヶ原の戦いの後、上杉景勝は米沢 30 万石に移封、庄内は慶長６年(1602)最上義光の領地となる。最上義光は、大宝寺城を「鶴ヶ岡城」と名前を改め、隠居城として整備する。場内の建物の造営、堀、土塁を整備、二の丸に重臣の屋敷を置き、城下町の建設を行う。

（５）酒井氏の入部

元和８年（1622）最上氏が改易され、信州松代から酒井忠勝が入部する。鶴ヶ岡城跡を拡張し、二の丸・三の丸と取り立て、町屋を城外に移す。本丸・二の丸の修復に 60 余年を要した。

３　検出された遺構（第３・４図）

（１）　二の丸堀跡と百間堀跡

・　二の丸堀跡（SD1）

堀幅は約 22ｍで、堀底は平坦な箱堀である。約 1.3ｍの堆積土に覆われていた。造成時に

中世の遺構を破壊しており、中世の遺物が混じるが、江戸時代の陶磁器や木製品が大量に出土した。土塁に面する堀岸には、土留めの杭列と石積みが確認された。

・ 百間堀跡（SD3）

赤川の旧河道である自然地形を利用して造成されたとされる。中土手をはさんで二の丸堀の南に広がる。調査地点の深さは約 80cm、堀岸から遺物が多く出土した。

（２）二の丸土塁（SF2）

調査地点の高さは 2.2m、幅は 7.7mで、二の丸堀跡からの比高差は 6.7mである。断面の観察により、版築によって造成されている。土塁の整地層の上層と下層では、内容が相違しており、工程差があったと考えられる。この工程差は、別の地点でも確認され、第１段階では、水平方向に整地層を築き、第２段階でその内側に斜方向に整地層が盛られ、最後の第３段階水平方向に１回の厚さ 10cm 以下の細かい整地層が連続して盛られる。また、調査区土塁内側の第三段階の版築は、幅約２m程の単位で行われている。

・石積みと杭列について

土塁基礎部分に、土留めの施設と考えられる石積みと外側に杭列が巡るのが確認された。二の丸土塁の全周にわたると考えられる。

石積みは、長さ約 30～50cm の俵状の自然石を３～４段に交互に積み重ねている。石積みの高さは約 50～70cm である。積み上げる際には、石の長軸を土塁に直交させて積んでいる。石積みの内側には、排水用の施設と考えられる裏込石が認められる。また、石積みをとめる役割と考えられる３列の杭列が認められた。

石積みと土留めの杭列の設置は、以下の工程で行われたと考えられる。

① 堀岸にそって整地・土盛りを行う。

②一番外側の杭列（SA184）を打ち込み、杭の内側に横板を渡し、その内部に土盛りを行う。

③内側に杭列（SA183）を打ち込む。内側に横板を渡し、内部に土盛りを行う。

④１段目の石積みを据え、その内側に杭列（SA185）を斜方向に打ち込み、土盛りを行う。

⑤杭列（SA185）の上に２段目の石を積み、内側に土盛りを行う。

⑥３段目の石を積み、土盛りを行う。

石積み上の整地層上から、1630～1650 年代の肥前磁器（伊万里焼）の皿が出土している。（酒井氏入部後の造成）。

土留めの杭は、ヒノキ材が用いられている。また、角材で枘孔が確認される材があり、建物の建築部材を転用したものと考えられる。なお、延宝４年（1676）から７年にかけて土塁下部に乱杭を設けたという記録がある。

・溝状石組列

土塁調査区の北東に検出され、検出長は約 24m、幅は約 40～50cm 程度、直線的に北東から南西にかけてのび、南西側にかけて下る。表土直下で検出され、土塁中ほどより下に平坦面を形成して構築されている。断面は、両脇の石を立てる溝状の構造で、溝の底に大きさ約 10～15cm の楕円形の丸石を３～４列に並べ、両脇にやや大きい石を立てて据える。役割については不明であるが、土塁造成時よりも次期が新しく、明治期以降になる可能性もある。

（３）二の丸内の建物跡

絵図面では、二の丸南側の張り出し部分に相当する。絵図面では建物等は描かれていない。

植樹枡部分の７ヶ所についてトレンチを入れた。

江戸時代と考えられる第一遺構面で建物跡を確認した。礎石建物と考えられる。また、２条の平行する小礫を敷き詰めた溝跡が確認された。最上氏時代の家臣屋敷、もしくは酒井氏に関係する建物と考えられる。

（４）松原地区

４・５区が該当する。江戸時代の延宝６年（1678）の絵図面では、家臣の屋敷地となっている。明和７年（1770）の絵図面では松原になり、建物は認められない。南端は百間堀となる。４区の北側には３基の井戸跡が確認されている。南側の４－２区では、火葬骨が出土する墓壙が４基検出され中世の墓地と推測される。５区では、中世の遺構として北側に二条の溝跡、竪穴状遺構、土坑が確認された。掘立柱建物跡も確認されるが、時期は明らかではない。江戸時代に帰属する柱穴や井戸も確認された。室町時代の大宝寺城の時期は屋敷地と墓地、江戸時代の初めの屋敷地であることが明らかになった。

（５）大宝寺城期の遺構

調査区内で室町時代から安土桃山時代にかけてと考えられる遺構が認められる。１区の中土手の整地層下、５区、２・８区の整地層中や下に掘立柱建物跡の柱穴や溝跡が確認された。特に８区の二の丸内には柱穴が密集して分布し、整地層中から大量の輸入陶磁器類が出土している。この地点は建物跡が継続的に建てられていたと考えられる。

４　出土した遺物

二の丸堀跡の覆土中からは、江戸時代を中心とした陶磁器、木製品として漆器、下駄、曲物、その他の生活の道具、祭祀具、付札、加工材、板材などの多様な生活の道具が出土した。

また、二の丸郭内からは、鶴ヶ岡城跡以前の大宝寺城に関連すると考えられる中世の遺物が出土した。陶磁器では、中国産の輸入陶磁器・古瀬戸・信楽焼・珠洲焼・越前焼・備前焼が認められる。

中世の遺物

- 中国産陶磁器（白磁・青磁・青花・天目茶碗・褐釉陶器）
- 朝鮮王朝産陶磁器
- 国産陶器（古瀬戸・珠洲焼・越前焼・信楽焼・備前焼）
- かわらけ・瓦器（風炉・香炉・花瓶・擂鉢）
- 石製品(戸車･石臼･五輪塔･石鉢)

近世の遺物

- 国産陶磁器（唐津焼・伊万里焼・瀬戸・美濃産陶器・関西系陶磁器・大宝寺焼）
- 瓦（赤焼瓦、19 世紀）
- 木製品（下駄･曲物･箆･槌棒・箸・釘・栓・錘･糸巻･櫛･折敷･祭祀具･付札･箱物・加工材・板材・刳物・杭）
- 漆器（岩手県浄法寺産と考えられるもの）

遺物の時期的な出土傾向であるが、特に 15 世紀になると、輸入陶磁器の青磁・白磁の出土量が多くなり、あわせて国産の古瀬戸・珠洲焼・越前焼の出土量も多い。この時期は、武藤氏が安定した支配基盤を維持していた期間に相当する。

16 世紀代も、青磁・白磁・青花、瀬戸・美濃の陶器などが一定量出土している。

16 世紀末から 17 世紀にかけての時期の遺物は、出土量が少なく、日常品に限られる。当期は、武藤氏が衰退・滅亡し、上杉氏や最上氏と支配が移る時期である。

江戸時代の遺物は、陶磁器においては肥前産が主で日常品が中心である。また江戸後期の遺物の出土が多く、廃城の際に捨てられたものと思われる。

引用・参考文献

大瀬欽哉 1962『鶴岡市史』上巻

鶴岡市史編纂会 1996『図録　庄内の歴史と文化』

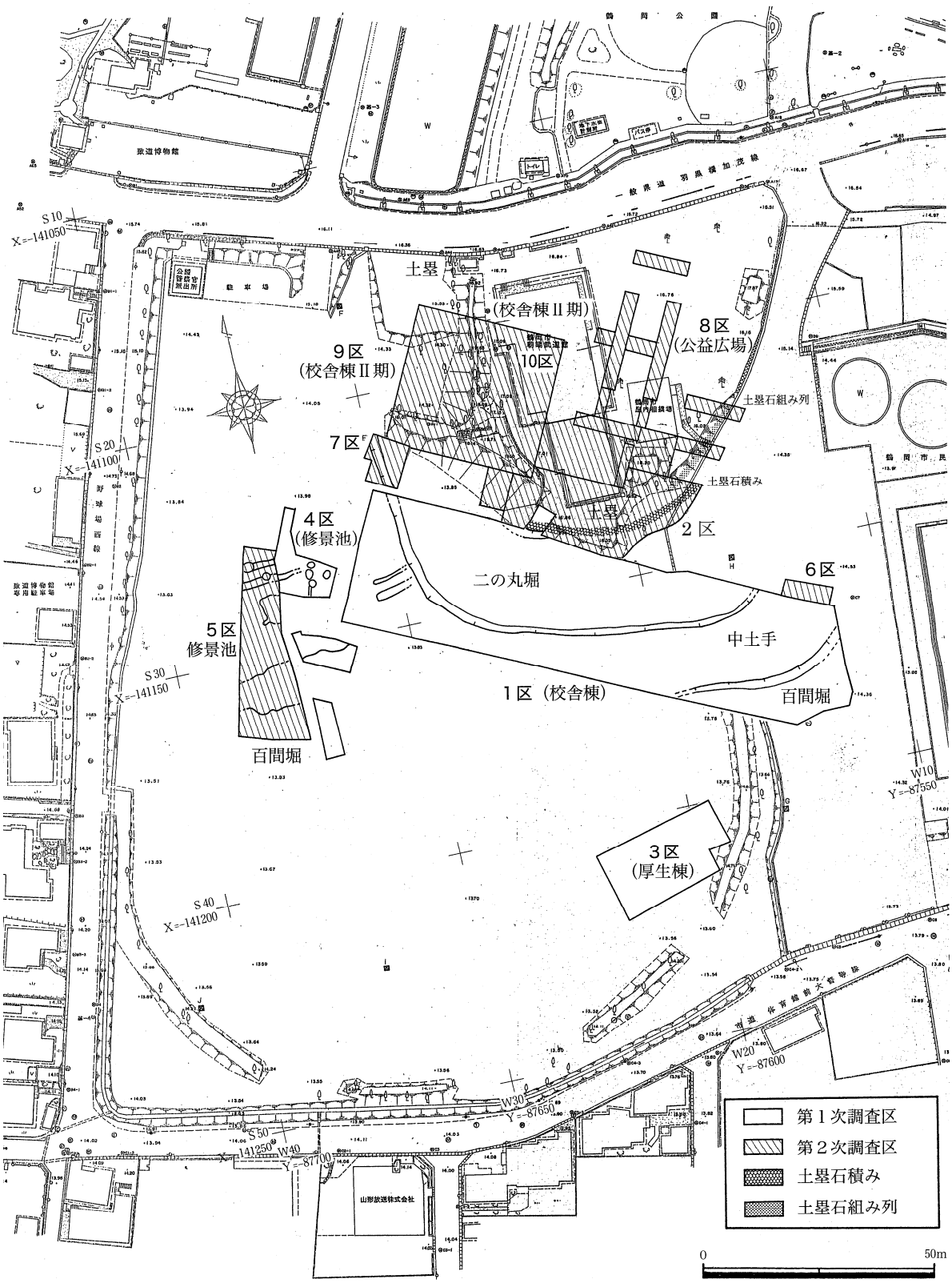
山形県埋蔵文化財センター2002『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集

菅原哲文「鶴ヶ岡城跡」『一般社団法人日本考古学協会 2016 年度弘前大会　第Ⅲ分科会　北日本における近世城郭研究報告資料集』pp,321-344 日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会

鶴ヶ岡城関連年表

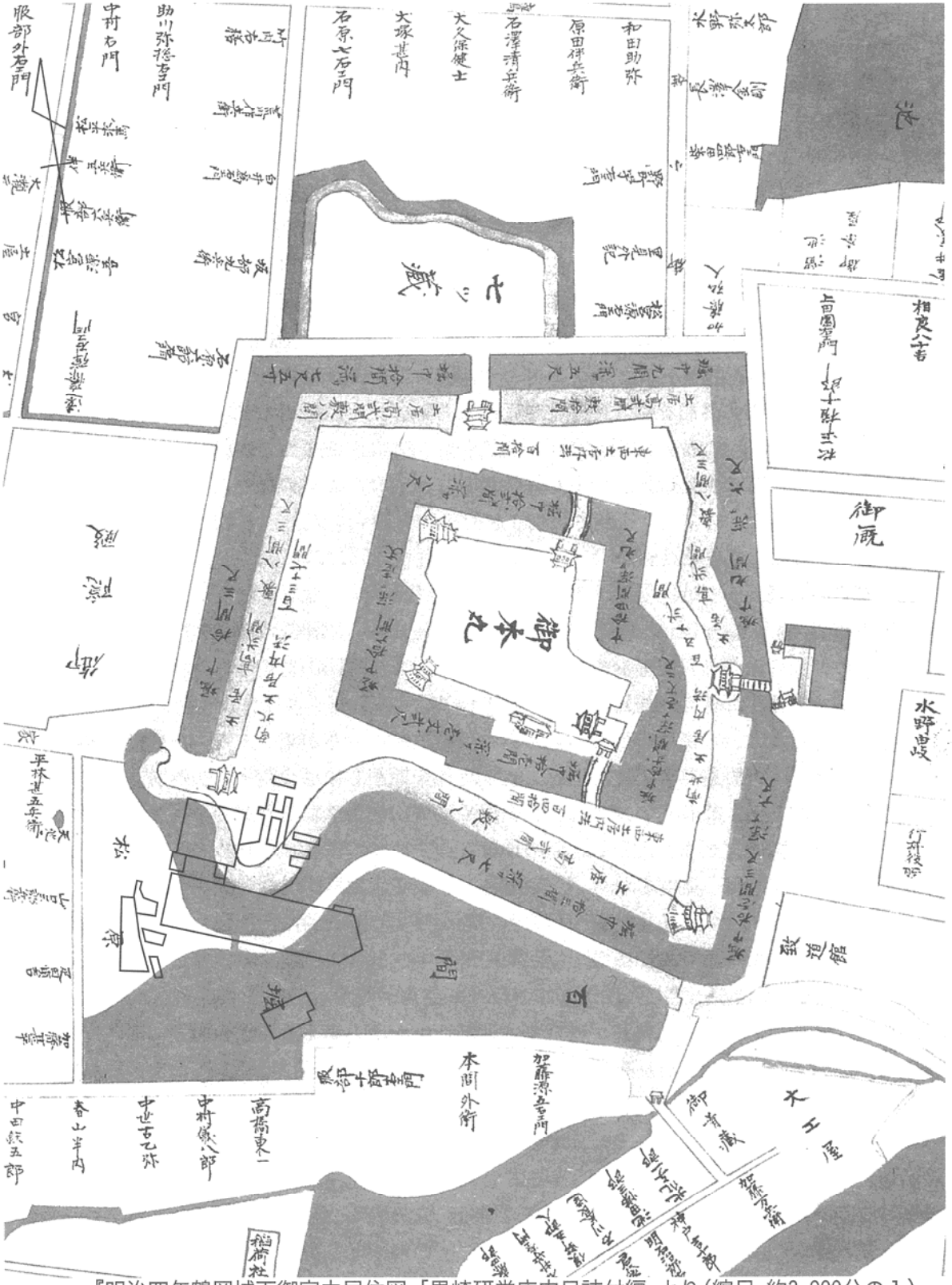
年　号	事　項	文献
文治５年(1189)	源頼朝、奥州征伐をを行う。田川太郎行文、秋田三郎致文ら庄内の有力土豪が滅亡する。武藤氏、大泉荘の地頭となる。	「東鑑」
承元３年(1209)	地頭大泉氏平が羽黒山の社務に干渉し、多くの福田(社領)を侵害したため、衆徒らが大挙して鎌倉幕府に訴え出る。	「東鑑」
鎌倉末～室町初	武藤長盛、大宝寺に居住する。この頃、大宝寺城が築かれたと考えられる。	「大日本出羽国大泉荘当家藤原殿前七代系図」 「筆濃餘理」
興国５年(1344)	南軍の拠点であった藤島城が、大泉氏や阿保氏らの北朝勢力によって陥落する。	
寛正３年(1462)	武藤淳氏、出羽守に任ぜられる。	
寛正４年(1463)	淳氏上洛し、将軍義政に謁見し、金万疋、馬十匹を献じる。	
文明～長享 (1469～88)	武藤政氏、羽黒山別当となる。	
永正９年(1512)	武藤氏と砂越氏の闘争始まる。砂越氏雄の軍、東禅寺を攻める。武藤澄氏大敗し千余名の兵を失う。	「筆濃餘理」
永正10年(1513)	砂越氏、田川郡に進撃するが、武藤澄氏に敗れ、砂越氏雄・万才丸の父子は討死になる。	「筆濃餘理」
天文元年(1532)	砂越氏維田川郡に侵入し、土佐林氏の藤島城を攻め大宝寺を攻撃する。大宝寺城下は灰燼に帰す。	「羽黒山旧記」 「来迎寺年代記」
天文～永禄頃 (1532～70)	この頃武藤（大宝寺）氏は本拠を尾浦城(現鶴岡市大山)に移し、大宝寺城はその支城とな	
天正11年(1583)	武藤義氏、尾浦城で最上義光に通じた前森蔵人によって奇襲され滅ぶ。 (庄内物語・荘内年代記等では、天正10年)	慈恩寺所蔵三千仏画幅の背記による
天正15年(1587)	武藤義興、最上義光の軍に完敗し武藤氏滅亡する。最上義光、庄内を支配に治め、中山玄蕃を尾浦に駐在させる。	
天正16年(1588)	上杉景勝の属将本庄繁長、義興の養子となっていた実子義勝と庄内を急襲し、庄内勢を十五里ヶ原の戦で破り、全庄内を獲得する。大宝寺城・尾浦城、兵火に燃える。	「来迎寺年代記」
天正18年(1590)	上杉景勝の手によって、庄内の検地が実施される。庄内・由利に太閤検地に反対する一揆が勃発する。	「来迎寺年代記」
天正19年（1591）	一揆が平定され、庄内が上杉景勝の領地となる。直江兼継によって大宝寺が取立てられる。	「色部文書」
慶長６年（1601）	最上義光が庄内を加増され、大宝寺城を隠居城として整備する。	
慶長８年（1603）	大宝寺城を鶴ヶ岡城と改める。	「菅原政次記」
慶長19年(1614)	最上義光没する。鶴ヶ岡城二の丸で一栗兵部の乱起こる。	「渋谷伝右衛門覚書」
元和８年(1622)	最上氏が改易される。酒井忠勝が庄内藩主となり、鶴ヶ岡城を居城とする。	「徳川実紀」 「大泉紀年」
元和９年(1623)	椙尾大工魚住九右衛門が本丸地割を仰せ付けられる。二の丸枡形を引き出す。町割りが始まる。	「編年私記」
承応元年(1652)	大手門が建てられる。	
承応２年(1653)	本丸御殿の御居間・白木書院・寝間等新築する。	「承応元年より御普請所覚書(鶏肋編)」
承応３年（1654）	二の丸に御隅櫓が建てられる。	
明暦２年(1656)	本丸御殿が完成する。	
万治元年(1658)	西御門・内北御門・外北御門が建てられる。	「承応元年より御普請所覚書（鶏肋編）」
万治２年（1659）	本丸に御隅櫓が建てられる。石垣に金峰石を使用する。その後、延宝３年(1675)までに渡櫓やいろいろな土蔵が建てられる。	「金峰山御留帳」
宝永元年(1704)	お城稲荷神社が建てられる。	
文化６～文政９年 (1809～1826)	城内の建物が瓦屋根にふき替えられる。	「大泉叢誌」
明治元年（1868）	戊辰戦争で庄内藩が敗れ、城を官軍に明け渡す。	
明治8年(1875)	本丸御殿等の建物の取り壊しを開始する。	
明治9年(1876)	城址が公園となる。本丸御殿などの建物が壊される。土手が崩され、堀が埋められる。二の丸南側に公園道路が作られる。	
明治10年(1877)	本丸跡に庄内神社が建てられる。	
明治38年(1905)	この頃までに百間堀跡が水田となる。	
昭和23年(1948)	百間堀跡に運動場・市野球場ができる。	
昭和42年(1967)	昭和42年(1967)旧二の丸西御門辺りに武道館完成。	
昭和63年(1988)	御堀整備事業に係る緊急発掘調査を鶴岡市教委が実施、検出された南側石垣の一部を復元保存する。	
平成４年(1992)	鶴岡市教育委員会、旧二の丸テニスコート地点の試掘調査を実施する。	
平成11年(1999)	鶴岡市野球場を解体、県埋蔵文化財センターによる第１次調査実施。	
平成13年(2001)	東北公益文科大学が開学する。	

表１（山形県埋文 2002）



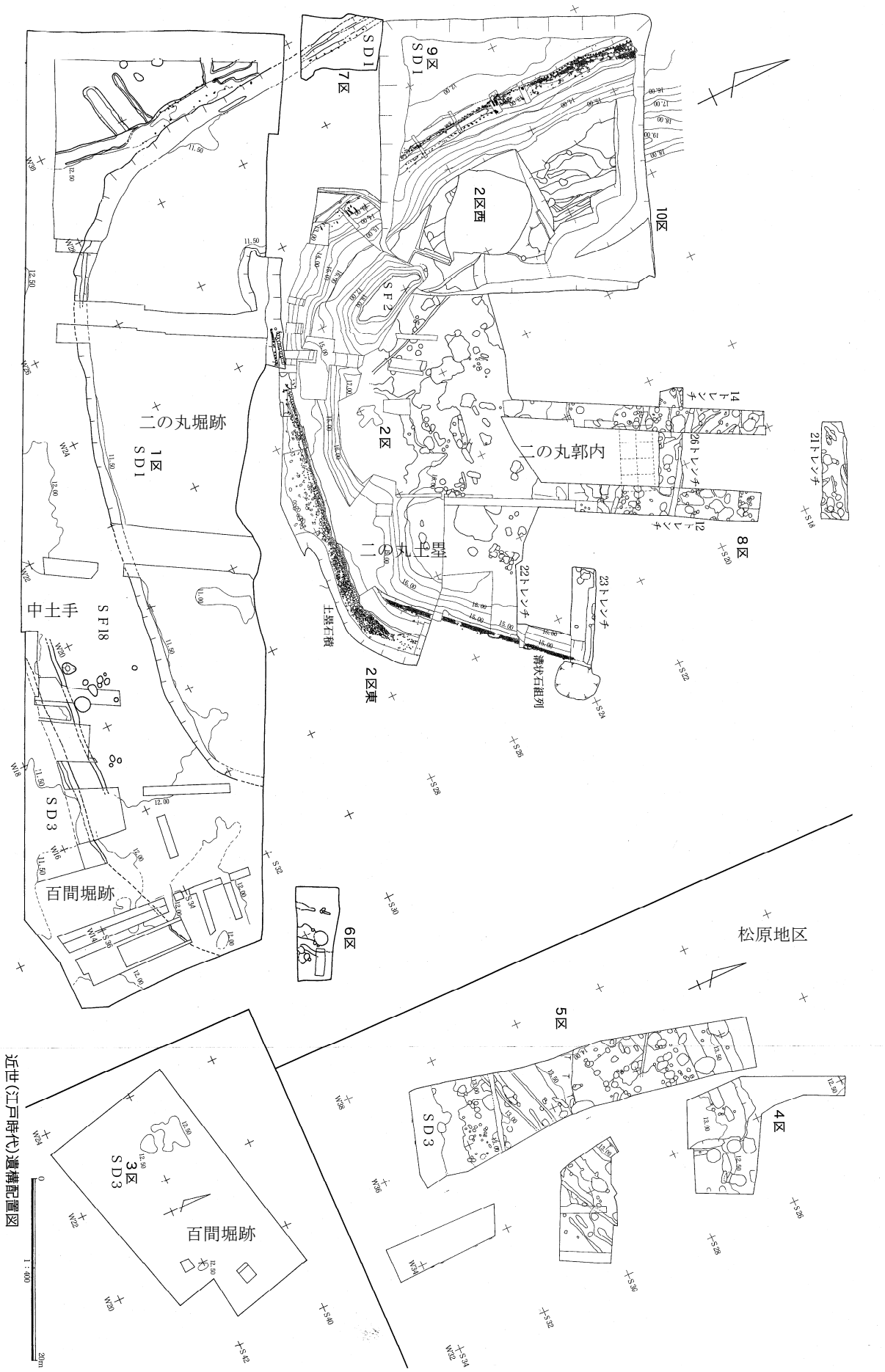
調査区概要図（S＝1：1200）

第1図（山形県埋文 2002）

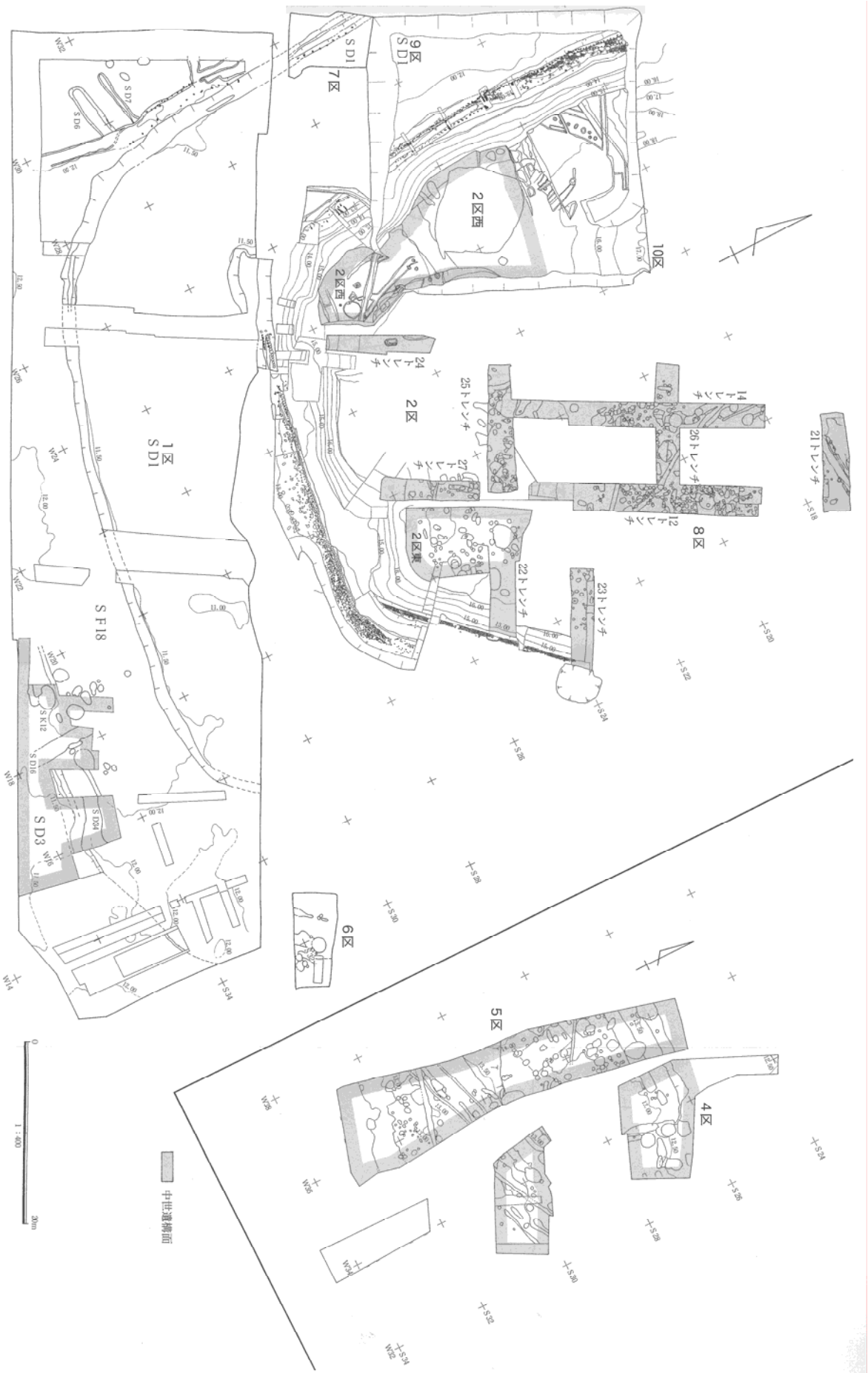


『明治四年鶴岡城下御家中居住図』「黒崎研堂庄内日誌付編」より（縮尺・約3,000分の１）

第２図　明治４年鶴ヶ岡城絵図面



第３図　調査区遺構配置図（近世）（山形県埋文 2002）



第４図　調査区遺構配置図（中世）（山形県埋文 2002）

1

鶴ヶ岡城跡の位置

・赤川の支流、青龍寺川と内川の間の微高地に立地。

・本丸と二の丸北側が公園となって残る。三の丸は市街地となっている。

2

鶴ヶ岡城跡について

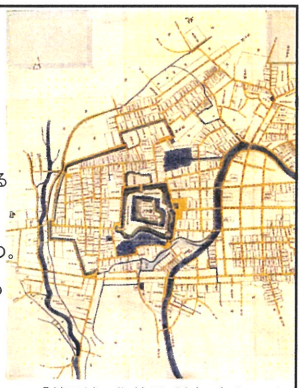
・中世は大宝寺城と称された。
室町時代初期に武藤氏により築城。

・安土桃山時代～江戸時代初
武藤氏→上杉氏→最上氏と城主が変わる

・現況の城は、元和8年(1622)より庄内藩主となった酒井氏による改築によるもの。

・本丸、二の丸、三の丸、各郭の外周をめぐる堀と土塁を備える輪郭式平城

・二の丸は南北約400m、東西約500m
三の丸は南北約900m、東西約1,200mの規模。



「鶴岡城下御絵図」延宝6年(1968)
(鶴岡市郷土資料館)

3

鶴ヶ岡城跡の調査経緯と調査遺構

平成11・12年東北公益文科大学新築事業(大学院・研究センター)により、延べ11,245㎡を調査。

1、二の丸堀跡、百間堀跡(酒井氏の時代に造成)

2、二の丸土塁と杭列

3、二の丸郭内の遺構(酒井氏とそれ以前の中世の時期)

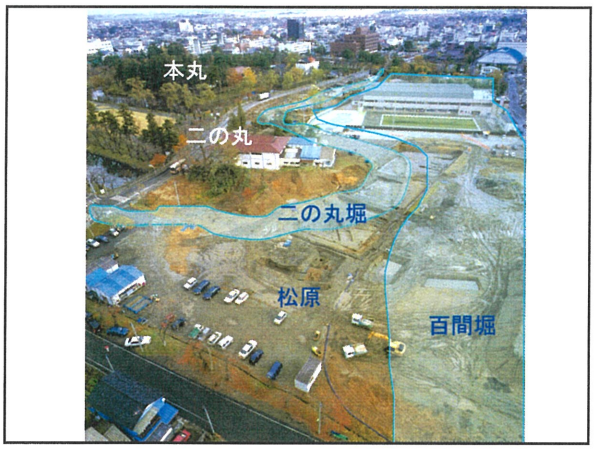
4, 二の丸掘と百間堀間の松原地区の遺構(中世と江戸時代前期頃)

5、出土遺物について(中近世陶磁器・木製品等)

4

5

6


本丸
二の丸
二の丸堀
松原
百間堀

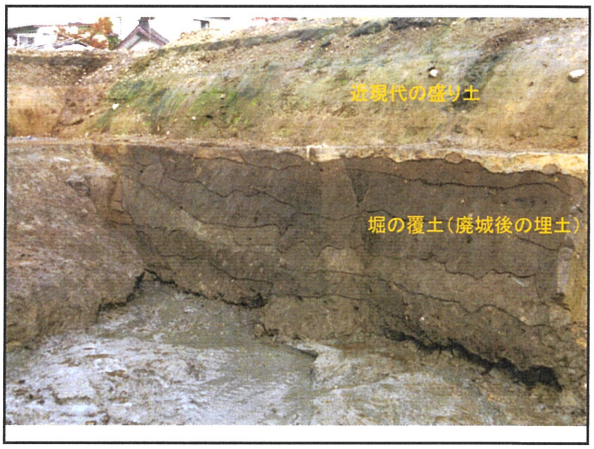
7

二の丸堀跡と百間堀跡
二の丸堀
中土手
百間堀

8

中世の遺構

9


近現代の盛り土
堀の覆土（廃城後の埋土）

10

11

12

13

14

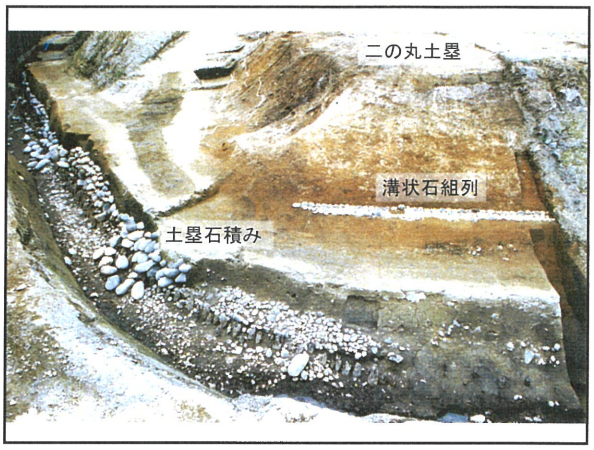
15

16

17

18

19



20

21

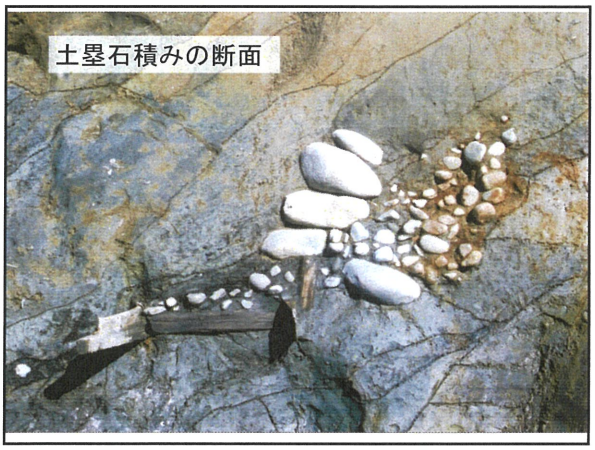
22

23

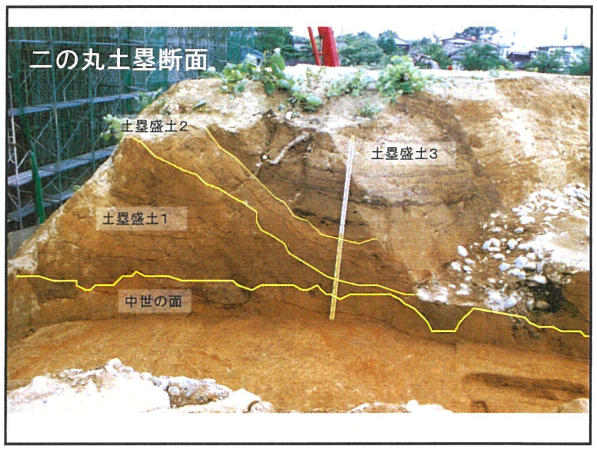
24

25

26



27



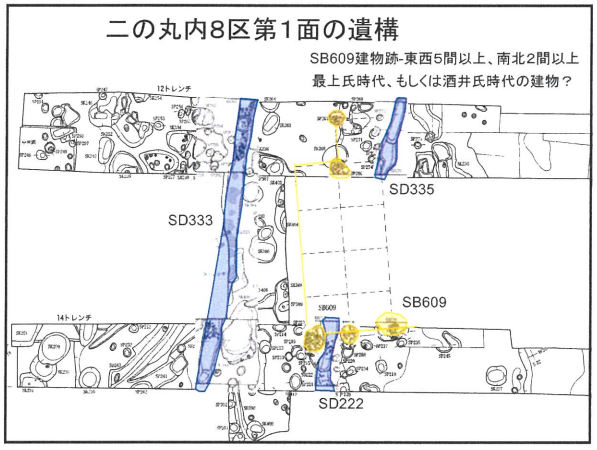
28

29

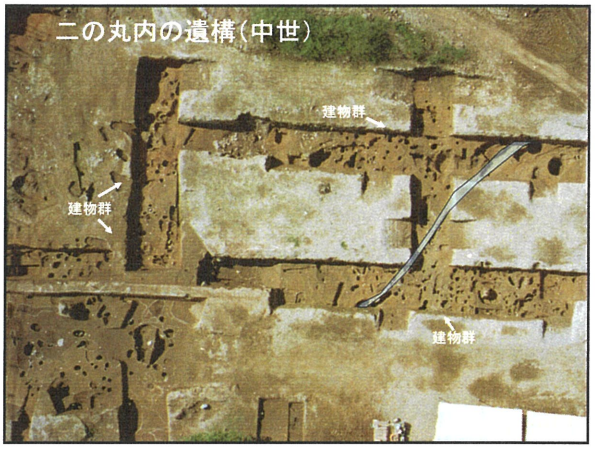
30

31

32



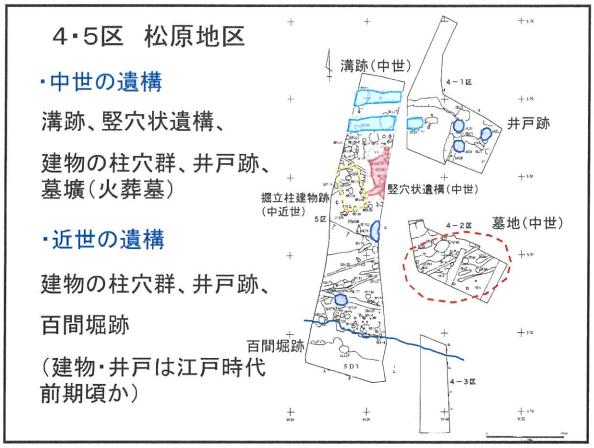
33



34

35

36



37

38

39

40

41

42

城から出土した遺物

1　中世（室町～安土桃山時代）の陶磁器

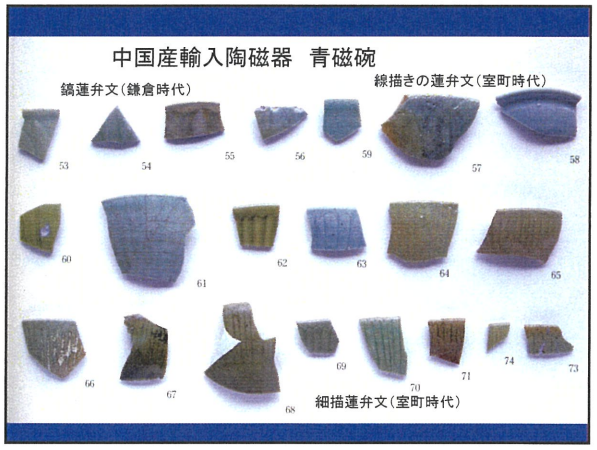
・大宝寺城の城主であった武藤氏により、中国産の青磁・白磁・青花・古瀬戸などの大量の高価な陶磁器がもたらされた。

・ 国産陶器は、能登半島の珠洲焼、福井県の越前焼が多い。甕・擂鉢の日常品が中心。日本海側に特徴的な流通である。

43

44

45



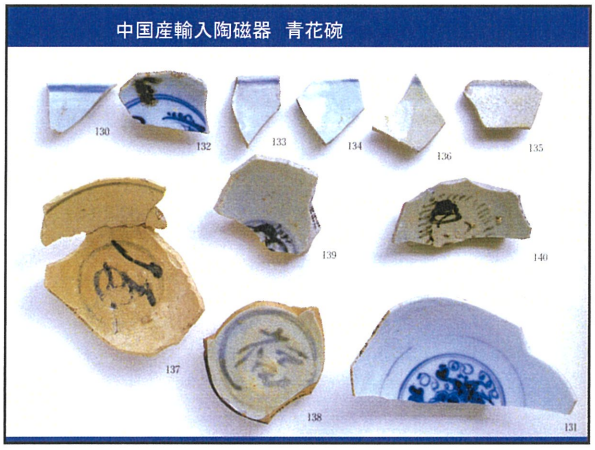
46

47

48

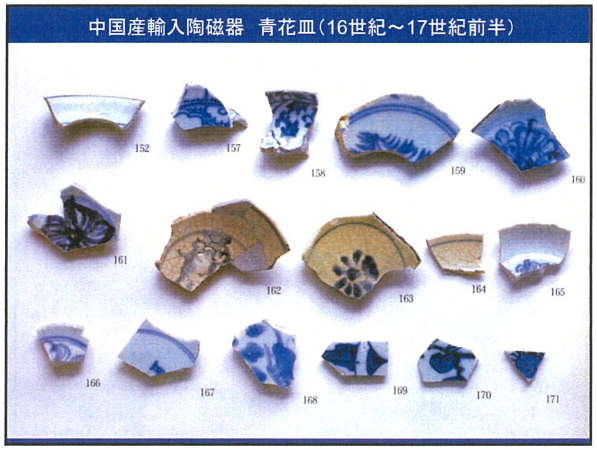
49

50



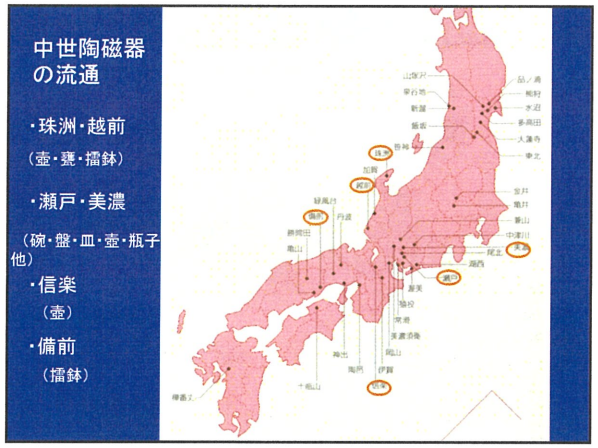
51

52



53

54



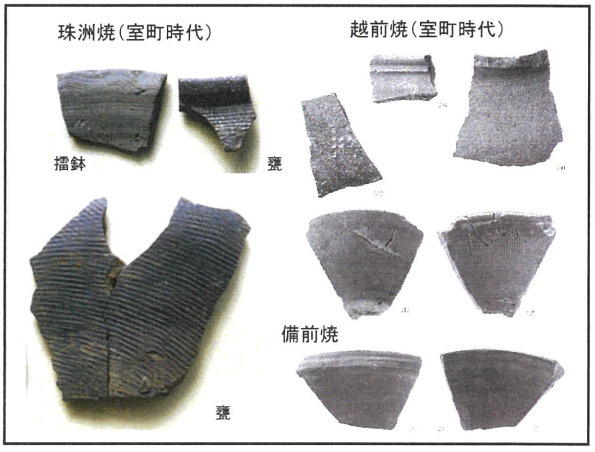
55

56

57

58

59



60

近世の遺物

1　近世の陶磁器

・九州の肥前国（佐賀県・長崎県）で焼かれた唐津焼・伊万里焼が中心。日本海廻りの交易によってもたらされた。

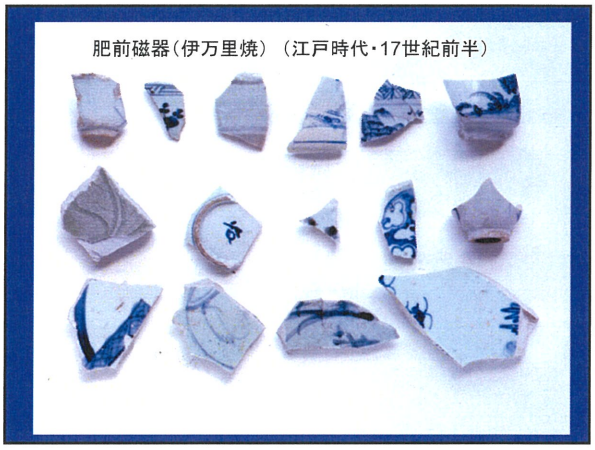
・堀跡からの出土品は、漆器・下駄・曲物・箸など日常生活で用いられる道具が中心。

・漆器には、岩手県の浄法寺産と考えられる椀が見られる。

61

62

63



64

65

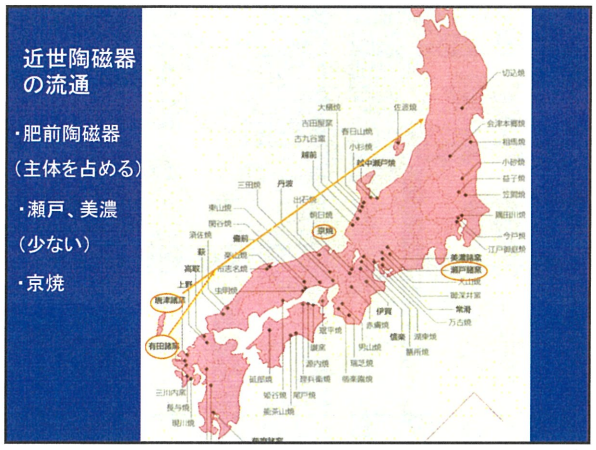
地元で生産された焼物（大宝寺焼）と瓦

・文化6年（1809）～文政9年（1826）にかけて、城内の建物が瓦屋根に葺き替えられた。

当初、瓦質のいぶし焼瓦が使用されたが、文政4年（1821）年から赤瓦に変わった。

大宝寺焼は18～19cにかけて鶴岡で焼かれた。

66



67

68

69

70

71

72